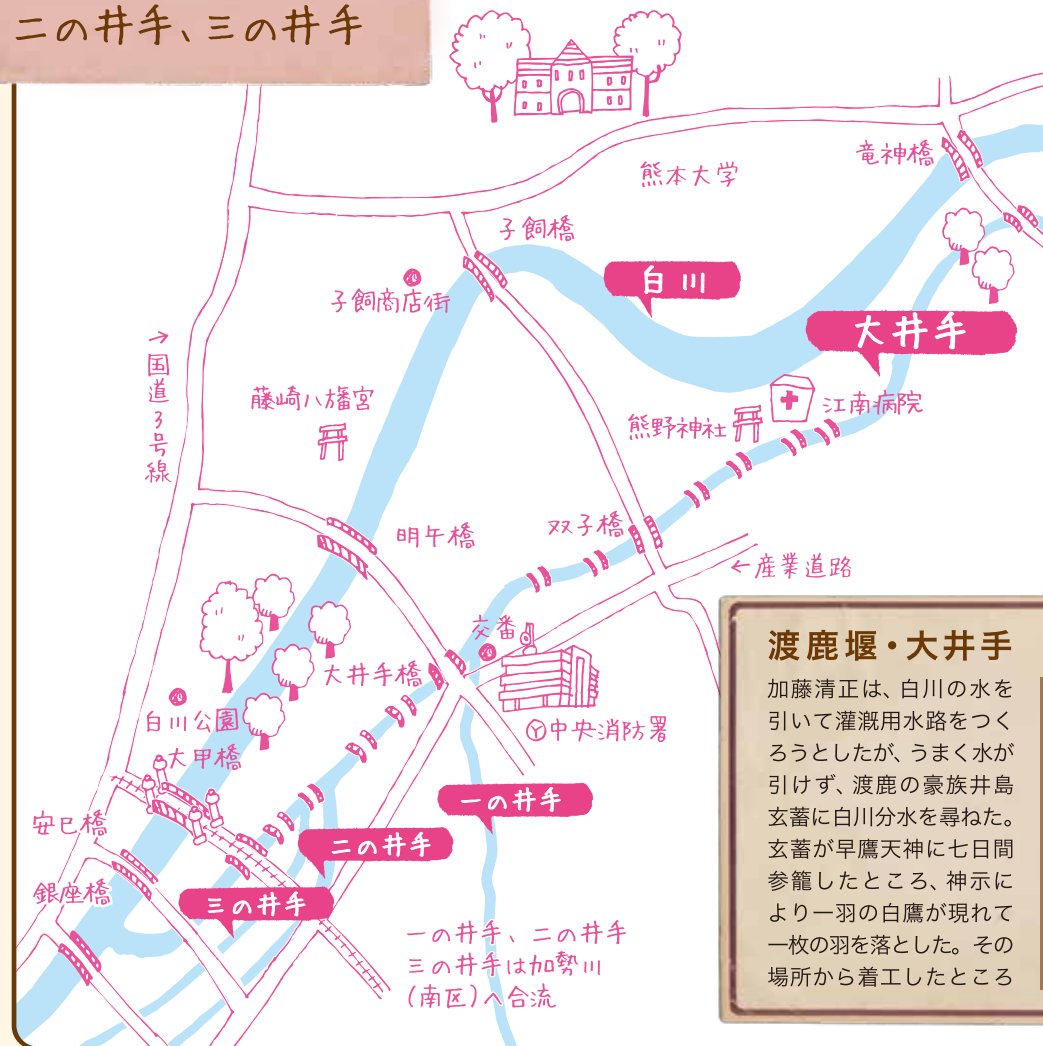


“大井手”とは？

“川”ではありません！

“農業用水路”です！

白川、瘦鹿堰と
大井手、一の井手
二の井手、三の井手



一の井手、二の井手
三の井手は加勢川
(南区)へ合流

大井手の 歴史と役割



渡鹿堰

渡鹿堰・大井手

加藤清正は、白川の水を引いて灌漑用水路をつくらうとしたが、うまく水が引けず、渡鹿の豪族井島玄蕃が白川分水を尋ねた。玄蕃が早鷹天神に七日間参籠したところ、神示により一羽の白鷹が現れて一枚の羽を落とした。その場所から着工したところ

の歴史逸話

大井手の開墾が成功した。清正は、堰の守護神として、堰の入口に早鷹天神の分神の祠を設け、堰の守護神としての社地を寄進して渡鹿天満宮が建てられた。境内に、加藤清正が堰の築造を監督した跡という腰掛石と、その時代のものと伝える安山岩の大石が残っている。
(参考文献：平成肥後國誌より)



加藤清正
肥後熊本藩初代藩主

熊本市立熊本博物館所蔵

とろくぜき おおいで 渡鹿堰と大井手の築造

白川では、流路変更や多くの堰など治水や利水施設が造られました。渡鹿堰、大井手も白川の水を田に潤すため、加藤清正公の手により慶長十一年から十三年(1606年～1608年)に築造されました。築造当時の面積で、1,083haの水田に用水を供給する白川水系最大の利水施設です。

渡鹿堰は、白川が平野部に入る直前の渡鹿に堰を造り、白川左岸を開削して大井手へと取水しています。この堰の特徴は、堰が川に対して斜めに突きだしていることで、これにより洪水時の水の勢いを削ぎ、通常時は少ない水を効率的に取水できるようになっています。大井手は、渡鹿堰から取水した水を流す農業用水路で、渡鹿、大江、新屋敷を流れて安巴橋の下で再び白川に合流する全長2.6kmの幹線水路です。途中、一の井手、二の井手、三の井手の三つの分流が設けられ農業用水として利用されています。

大井手と一の井手、二の井手、三の井手の役割

幹線水路の大井手は、途中で三つの井手に分流しています。一の井手は約6.5km、二の井手は約6.4km、三の井手は約6.6kmの長さで、熊本市南部の農地約250haを潤す現役の用水路として利用された後、加勢川に注いでいます。この水が、熊本のおいしいお米を作る源となっています。



渡鹿菅原神社と腰掛石



熊本市南部の農地